こひて吸物酒にて長座す。大助女子を產す、今日の事なり。產湯を懸るはよろしかろず、三十日も五十日も百日も湯を用ひざるをよしとすと妙實語る。夜に入りて高本氏へ歸へる。中山市之進、長瀨七郎平眞幸來り、深更迄語りぬ。中山氏は宿す、今夜も酌みぬ。眞幸長哥を寄す。富田氏にて水俣ノ人織田友岳、日田ノ人田嶋元善に相識となる。

**三日**　己巳。晴る。辛島才藏來る。昨日立寄りし返禮也。富田大淵より書を寄せ書生を來たす。共に至る。酌みて大淵及び其の子謙治、大山元格、小柳春桂、織田友岳、菊池連、小堀友益、都筑君治、桑原榮吉等と白川を船にて渡り、國分寺を經て砂鳥(取カ)に休ひぬ。壹里半計東南に來りし。是レ〻畫圖湖に船を浮べて遊び侍る。夜に入て砂鳥に歸へり亥ノ刻に及んで、富田氏の宅迄歸へりて宿す。

**四日**　庚午。皮(彼)岸になる。晴る。齋藤高壽へ入る。大槻哲太始メ武術の士來り語る。酌みて醉に至りて立ッ。小兒の爲メに馬の手綱を引く事あり。藪孤山の所へ入て語る。座に井ノ口傳右衞門有り。暮に及て立ち途に杉(松)浦角助に逢ふ。高本氏に歸て宿す。深更迄酌みぬ。富田大淵今朝詩を作りて寄す。

**五日**　辛未。秋分。八月中。戌の初刻に入る。晴る。古町慶德堀町日向屋又右衞門所へ至る。高本家〻案內有て也。旅宿分の故也。歸へる時に菊翁へ寄る。語りて立ち順正寺へ至るに、他出と稱す。松岡八郎平所に入るに他出、壽八郎に逢ふ。藤井慶助所へ入る。布屋が子源之進、古賀昌齋に逢ふ。出でゝ坪井立町兵藏所に飲む事有り。高本氏へ歸へるに長瀨眞幸、松浦角(助脇)來り深更迄語る。酌みぬ。坪井二丁目米屋和吉所へ寄りて、岡松生の父を尋ぬ。他出と聞(え)へし故に、姓名を記るして出ッる事有り。

**六日**　曇る。井ノ上平八所へ至る、語る。弟諫取次齋藤氏へ寄る、子佐太郎案內にて山東佐重郎(十カ)所へ入り、蒲池喜左衞門所へ入る。吸物酒肴素麵飯出でゝ夜迄語り、藪氏塾へ入りて宿す。文忠、土屋喜惣次、衣川彥重郎(十)等と語り侍る、哥よみ侍る。詞言書　人々と集ひてからうたなり共大和哥なり共、よみ玉(給)へと進め侍りて　正　之

圓居して語るぞ嬉し秋の夜のたゝ(ま)くおし(を)き唐錦かも

**七日**　曇りて雨少ク降る事有り。石井改(政カ)重君を拜す。文忠詩を寄す。此の方北嶋を經て常福寺にて林葉雨を尋ぬ。他出也。山王川を渡り本妙寺なる清正公參詣多(ほ)ッし、卯辰の間に向ふ。本妙寺方丈涅槃像の開眼管絃有。伊(井)芹川を經る時にだに山の士屋敷に又タ

樂の音を聞く。祇園の邊り中村忠亭翁を尋ぬ。他出也。鋤身カすきの見崎にて安野業形助所へ尋ぬ、他出也。富田氏へ入り出でゝ大越多重郎を尋ぬ。夕番にて家に在らず。草野雲城十平翁の病を問ふ。其の子嘉膳に初對面、病室に通りて翁と語る。齋藤氏の門前過ぐ。時に立寄りて鹽山金平清住健藏と語る事あり。夜に入て高本家へ歸へりて宿す。長瀨眞幸萬葉東歌の所を持ちて打寄りて讀む事有り、深更迄語る。

**八日**　曇る。岡松龜吉父の言を傳へて來る。鹽山金平來る。赤崎山田の作を論ず。高麗門を出で三輪宇三所を尋ぬ、鹽井横丁へ歸へりて坂本伊右衛門を問ふ、皆他出也。孝子海津嘉右衛門を尋ぬ、他出。藤崎八幡宮石階を登る、石鳥井左り子ノ日の松門を入る。左り大楠有り其餘楠大木多フし、石燈籠左右に有り。左り經堂右に鐘樓連歌屋なり。樓門を入り左右廻廊也。拜殿宮殿大イ也。西に向ふ末社あり、廻廊の南連哥屋の東に續きて藤に玉垣なして有り。是レ將門追罰の時に勅使鞭をさしてつきたる也と傳ふ。古業京町戸波儀太夫の宅へ入る、州樹妙尼及び吉太郎詩哥を見る事あり語る。吉太郎句讀寮に來十五歳迄居ん事を願ふ。教授にしすべしと諾話脫カす。觀音坂を下りて竹部へ入り長岡監物下屋敷に至りて伊津野可八郎を尋ぬ。同所茶屋と號する邊りに宅有り。入る。名維正、字子直、汝洋と號す。語りて桂昌寺見性カの脇より東へ行き、三軒屋町を左に見て猶東に行き、村本郡治所へ入る。其ノ母しつ止めて村本が歸へるを待つ。酒出でゝ語る。夜に及で高本氏へ歸へる。深更迄語りて井ノ上氏が事に及べり。山口眞積詩を寄す。

**九日**　晴る。李綸と出てゝ別れ、予は入江潮路を尋ぬ、次男鯛瀨小左衛門に相識となる。齋藤氏の宅へ入る。鹽山生と酒店に酌む。龜吉父の旅宿を問ふ。他出のよし。夜に入て高本家へ歸へる。萬葉上野哥を高本翁讀めり、深更迄酌みぬ。佐伯千禮詩を寄す。

**十日**　雨降る。長瀨眞幸來り、楠子辨疑を借りて今夜來り語るべしとて歸る。詫摩郡漆島代繼社禰宜漆島伯耆守菅原軌典、城下祇園社修職法印本覺寺良恕、行田夏東作信風、赤星三七武鄉等の送る哥を眞幸屆けたり。皆ナ古町のよし。先日李綸より中村數右衛門友連、嶋田久左衛門源周敏、龍田山下なる錦江、山鹿の人牧野佐三直視、同一直はじめ墨、續久左衛門友周、入江道甫雅敎、奥山三順知賢、升屋茂助永昌寄る所の哥を達せり。皆ナ眞幸より屆るのよし。

思ふ事有てよめる

さても〳〵とやかくやとの世の中をうらみむものをわれも知らすは

かくと語りけれは、高本翁讀りし哥也とて語らる。

世をうしとかこちし事は昔にて今はめくみと思ふ計そ　とぞ、樂舞を見る。

**十一日**　曇る。辛川亥次郎長○牛八へ見舞ふ。宗源左衛門、佐久間角助へも至れ共皆在らず。太守八幡淵へ水練稽古を見らる。藤井慶助所へ入る。小山三休、菅喜曾右衛門等と酌みぬ。白川の邊りに至るに人舟に有り、吉ケ谷千吾也。兄をは萬平といふとぞ。溯りて予は舟上り水に清めてうるげに寄んとす。酒無し。半里にして坪井立町茶店兵藏所に休ふ。飲みぬ、高木屋兵藏に與ふ。

正之

我こそは高山なるにたかき屋と名乘らすしはし休ひにけり

と云。藪翁ニ入りて語る。柿八を食ふて、塾へ參りて語る。三生に薩の詩文を借て豐後府内なる富の土屋喜三治喜哥よみてありけるといへる故に、書きへ返哥すべしと言ふにぞ、筆を取て書す。

土屋喜

哥

道わかぬ深山にすめるしつの男も心動ぬ大和言の葉

詞言書　土屋ぬしの哥に感し參らせて　正之

敷島の大和言の葉玉鉾のみち分ぬとは誰も思はじ地

と云。夜高本家へ歸へる。清住健藏、播摩赤石の僧覺峰を介して來りけるにより、紫溟高本翁對せらる。予も其の席に出ッ。閑谷學校に遊へる語に及びて、僧の悲みける事有り深更に及びても解けず、僧も宿せり。詩僧にて多〇〇詩を取り出でゝ翁へ見す。

**十二日**　晴る。予金峯山に登らむとす。高本家より山口榮五郎眞積、佐伯千禮を附けたり。嶋崎を經る時に藤井源兵衛所へ寄る。吉田又左衛門座に有り。鎌とぎを過ぎて鳥居井の本に中食す。午未の間へ登る事十八丁藏王權現午未の間に向ふ。未だ社に至らす井有り、社迄五六丁と覺ゆ。頂より嶋原普賢山は申酉の間に當りて煙立て見ゆ。今年四月朔日夜前山燒崩れて、小島六七出ッ。遠く見えたり。申酉の方へ山を下る。猿すべりと號す。東南に山の麓を廻り行く。上松尾中松尾を經て、高橋町へ入る。金峯山の麓より壹里と稱す。坪井川の下流にて、小船は入る也。酒店に休ふ。是レ城下入口迄壹里、山を左にして田崎に入る。宮寺を經て二本木に出ッ。是レ北に行きて城下に入る、石塘町を過ぎ三丁目の橋を渡り、洗馬橋を越へて、山崎なる高本家へ夜に

入て歸へる。其族伊藤長兵衞來り居る。今夜も深更迄語り侍る。西行の哥とて高本翁の語らる

中々に深山の奥そ住よけれ草木は人のとかを云はねは

となん有りし。細川家克ク走る人あり中津海安右衞門といふ、能の有ける時に三場より三番目の面あらで、八代迄十一里の所二時計に走り歸へりて、間に合ハせしよし、西依成齋は其弟子也とぞ。早や三四代になるよし。

**十三日**　雨少く降る。茂見惣兵衞所へ見舞、暫ク語る。日中に及て高本家へ歸へりて、安野業助の來るを待つ。暫クにして入來る。語て夜に及び、狩野朴仙も來りて酌む。今夜も深更に及べり。今日時習館に於て、新武の藝出精七十人計賞賜。長瀨眞幸も其内也、逢ひぬ。

**十四日**　雨降る。出でず。夜に入て洗馬橋を渡り鹽屋町を過ぎ、右へ新二丁目蔚山町堀ばたへ出て、切通を過ぐ、豆腐谷と號す。藤崎八幡宮へ參詣。廻廊に淨衣烏帽子にて神樂有り、雨の故參詣少し。又ク豆腐谷を歸へる、堀ばた棧敷多ふし。新桶屋町、新魚屋町、上職人町、新細工町、中職人町、新鳥屋町を過ぎ、鹽屋町洗馬橋を渡りて高本家へ歸へる。町挑燈多ふし。酌みぬ。宮川源吾、同橡兒、淺生九郎八なと出席也。眞積詩を寄す。酌みてよめる事有り。

言書詞　肥後國に而作る

明日者月能最中登謂士此國波今夜乃空乎見楚與賀里幾　正之

伊形氏乃子仁作而與侍類

我友登人者謂倍留人乃子登思波最茂賀奈志狩氣里　正之

と云。肥後國にての返哥有り。

答　順

此久爾乃今宵迺曾良越異國能最中濃月登美流比登楚要喜

新田山岑佐志昇流面影也心筑紫乃月仁見由良牟　正之

答

月見留耳新田乃山茂志良奴火之筑紫乃海藻同賀里氣利　正之

人々仁哥詩乎進而

人々仁見與哉登晴類々空登乎茂思計仁月須美渡留

と云。岡松生取去りぬ、山田濟治詩を寄す。

十五日　辛巳。朝曇る。後に晴る。藤崎八幡宮の祭禮の故に、早朝に李綸諸生と出ヅ。洗馬橋を渡り稠人の中を押分て、町を出でゝ數町、左に山御旅所能舞臺の邊なる棧敷に上る。年行事棧敷にて、長濱屋次七が世話也。長崎屋、和泉屋なと進めて酒食出ヅ。神輿三ツ出ヅ。勅使神護寺從ふ。隨兵とて具足武者百人出ヅ。頭共に百壹人也。長柄は五十本、神馬三疋、越天樂行はれて後に能始る。名代は長岡佐仲といふ。長上下也。能組は翁、竹生嶋、田村、杜若、安宅、祝言也。光永藏人とて敕使の家祇園社邊に有り。能畢て二ノ勢屯にて又タ棧橋に上て、李綸、長瀨眞幸、牧友次郎と見る。暮に及んで藤崎の八幡宮へ參詣、音樂有り、夜に入て高本家に歸へる。今夜は早く寢ぬる。

十六日　晴る。佐方仲園（坂田）、松浦勝永來り、薩摩の詩哥を見る。晚に及んで藪氏ニ入る。室人へ引はたを託して立ち塾ニ入る。豐後府内富なる土屋喜三次其ノ父の病を知りたるによりて歸省す。予も急きぬと進め侍る。夜に入て下馬の橋に及ぶに、先夫人の墓參より歸へらるゝに逢ふ。高本家へ歸へる。今夜も深更迄語る。峯又八（もカ）と出席す。孝子のよし。劒持重左君を拜す。今朝妾修夢を見る。

十七日　雨降る。顯妣を拜す。齋藤高壽へ至る。小笠原泰助、加賀美安治其餘武人共と酌みぬ。高壽に乞ふて卜筮する事あり。富田氏へ寄る、他出也。門人に薩の詩を託す。夜に入て高本家へ歸へる。長瀨眞幸來る。二十日同ク出立小酌有り。哥を寄す。深更迄酌む。

十八日　雨降る。藪氏へ入り志水壽八郎へ寄る。語りて食し、井上氏の事に及び、辨する事有り。蒲池喜左衛門所へ入る。草雲へ寄る。西依氏の事に及ぶ。子嘉膳、野中宗有と酌みて立つ。宗有南關の人、秋月の人右田親明なるか事を語る。藤井慶助所へ寄り、大淵に寄りて、夜に高本氏へ歸へる。山ノ内貞藏來る。深更迄酌む。詩哥の興有り。夜晴る。

言書（詞）　あつまのかたへかへる人に馬のはなむけすとて月いとあかゝりける夜すから、酒たうへてよめる　李順

共に見し筑紫の空を思ひ出よあつまの月に物わすれせて　正之

御返し

ともに見し月の夜すから圓居して語りしことを君もわするな

と云。山内貞藏は詩を作る。綠毛龜の作も有り、曉天に及べり。

**十九日**　晴る。朝、すきの見崎安野形助所へ入る。宗源左衞門へ寄り、富田大淵所へ入りて酌みぬ。

別れて松岡八郎平へ寄りて、山崎へ歸へる。李綸案内にて萩原多七郎宅へ入りて、幸島氏の離盃を受く。野尻次郎左衞門も出席、酌みぬ。醉つて高本氏へ歸へりて休み、晩に及んで和田登所へ入る。李綸も出席、酌みぬ。夜の五に及んで、高本氏へ歸へる。長瀨七郎平來りて、明後日出立同行の人も有るよし、山内貞藏も來りて深更迄語る。酌みぬ。書肆橘屋義兵衞に逢ふ。長瀨氏八代紙に哥を添へて寄す。京江戸及び叔父への書を認む。

**二十日**　晴る。安野形助、宗源左衞門へ至る。相良カ子榮八に途に逢ふ。富田大淵所へ入る。父子別盃とて酌みぬ。藪孤山へ入る。飯出ヅ。引はた柄袋を寄す。塾へも寄りて堀、衣川二生に逢ふ。柏原氏、辛島氏、和田氏、萩原多七郎等へ寄りて、高本氏へ歸へる。源左衞門來る。夜に入て松浦角助、和田登來る。酌みて曉天迄語る。詩哥の興有り。

詞言書　人々に哥からうたを進め侍りて　正之

何ともやよし足引の大和よりから打ませて乞ふる言の葉

高山正之の別れのあしたよみて奉りぬ　勝永

あきつすのとふとく廣き嬉しさもけふの別れの君にこそうき

春の日はあそひ暮して秋の夜はわかれをしみて短かりける　和田登　正尊

御返しするとて

短かしと思ふ計に秋の夜を語りつくしの言の葉そよき　正之

心たに同しかりせは別れ行千里の外も此やとのうち　正尊

うきとしも我は何共思はしよ遠き千里も鄰也けり　正之

予が薩摩より得たりし上布の維羅(帷子カ)を、高本翁の袷に易て着たりけるに、

詞書　臨別換征衣といへるこゝろを　李順

から衣かたみにこよひぬきかへてたちかわるともなるゝと思はん　正之

ぬきかへて行もはるかの旅衣きつゝ忘れす君をしぞ思はむ　正尊

なつかしき夏の衣をぬきかへて立別れ行かたみとそする　勝永

臨別更征表

きぬ〳〵を取かわしぬる別れかな君はいつくに月日ふるとも　正尊

紅の友にあふむの盃はわかれの酒となりにけるかな　勝永

紅友

隱れなきそのにうへても紅の友にくみかふ千代の盃

高山君に奉りぬ　勝永事　孤塊山人拜

醉て寢る千里や家となりにけり

虫の音もあかすや君を慕ふらんないてそふくる秋の夜の月　勝永

日の出るかたをそなたと思ひやらんいりなん月に君もしのへよ　順

勝永予か始の哥の返哥

詞書　返しとはかりに、

打まゝせて唐も大和もはてしなく廻りもはてぬ君かことふき　勝永

松記杉浦生送別之和歌　李順

當時道路不知賒。四海昇平是一家。今日却愁難縮地。分襟一去卽天涯。　和登

欲別情難盡。殘樽座夜深。只有中天月。玲瓏照寸心。　李綸拜

送別

凄風何瑟々。秋月照征衣。方有再遊約。人間意易違。

其餘高本書生の詩哥有り。頃日寄せたる詩哥多フク、爰に載するにいとまあらず。次

正が事を感して、高本今夜の哥爰に載す。

言詞書　ある人の操を傳へ聞て　　菅李順

孔子乃ふみけちけん人そ中〳〵によむ人よりもかしこかりける

斯て醉後和田登は共に宿す。寢なから歌を寄す。

いねやせん語りやせんといく度も今宵はかりの心つくしを　　正高（敬カ）

つくし潟盡ぬ名殘や今夜より幾夜も同じ夢を見るらむ　　正之

君が行く山と水との戀しさに同じ枕の夢にともかな　　正高（敬カ）

と云。昨夜認めたる長叔及ヒ前野父子、鑾次正への書と、京都若槻への書を封す。昨夜の哥長叔へは、

哥　草枕旅にもぬるゝ置筑（おくつき）のみまへのまゝの袂也けり

前野翁へは

盃を取る度毎に覺ほゆる君が教の言の葉よきを

と云。先月十三日將軍家竹千代君御誕生と承れは、竹駒を孟駒（なかこま）に改めよと、義介方へ申越し、長叔へも加筆致す也。薩よりの詩歌文章書翰類袋になし京都へ送らんと、高本家へ託す。清住生仲園今夜來る。仲園は文を先に寄せたり。金平も詩歌を寄せて來りし。

二十一日　丁亥。寒露。九月節。今曉子の五刻に入る。曇る。夜明けて長瀨眞幸旅裝して來る。辛島才藏、安野形助來る。別盃に時を移す。高本翁餞別に金子を寄す。山崎の天神の前を經る時に參詣す。下馬の橋に及んで、高本教授、辛島氏、安野氏、岡松龜吉なと數輩歸へる。是レ迄二十餘人なり。其送れる人々、山口榮五郎、伊形十次郎佐伯千禮、麻生九郎八、同龜之丞、首藤安治、宮川源吾、兒玉貞介、阿蘇生一人、小兒八百喜、教授の子喜彌太、李綸也。下馬の橋を渡りて瓊宅坂を登り、右に本城を見左りに時習館を見て、京町を經る時に藪氏へ寄る。昨日義介竹駒が事を知れる故に名を改めし事を謀るに、字は孟駒になして名を惟良になし玉（給）へといふ。夫婦共に予が形の見ゆる間は、イみて送りけると見ゆ。書生堀文忠、衣川彦重郎（十）、出町の町口まで送

る。德王村に及んで左に入る。札の辻より壹里北に來る也。岩崎市左衛門所へ入る、吸物酒出ッ。其ノ子武橋は長瀨と共に筑前へ遊べり。時を移つす。德王村は陵地也と里談あれ共、何レの天皇と知る人なし。陵地も慥ならす、高本綸は是レゟしはらくにして歸へる。酒と辨當を馳走せり。大久保を經る。左り二里計り菱形八幡宮有宇佐の始メなり。窟の深き有とぞ。御馬下を過き鹿子木是レ迄皆町並也。是レ迄飽田郡也。向フ坂を越へて熊木宿、照本ゟ三里の馬尺也。壹二丁にして拜ミ所の松とて右に有り。阿蘇山の遙拜所也。阿蘇山は正東也。寅の方鞍岳丑ノ方矢筈岳見ゆ。八方岳共稱す。右の畑の内、薩人爭鬪して七人死したる塚有り。左りには爭鬪の地を求めて戰ふたりといへる畑地原となりて少し有り。此の西に續きて笠圍の場所有り、松生ひたり。味取を經ぎ、内村山本郡也。結フ原ル出小屋を過ぎ、おとがい坂を越へ、廣ノ村町並也。熊本ゟ五里。比尼坂を經て、鄕原村を過ぎ、浦山坂を下りて、山鹿に及びて、船渡し、菊池より流るゝ川也。凡ソ壹丁計り渡りて、町家千軒と稱す。熊本城下は南也。是レ迄六里。山鹿郡とす。町の内右に溫泉有り。伊津野可八、來海三郎兵衛待ち居るかとて尋れ共居らず。岩崎武橋元記　長瀨七郎平眞幸と共に、米屋平次所に宿す。入湯など

して夜に入る。西の方五里、南の關神ノ方五里高瀨也。隈府は東三里也。今日李順別に臨みて哥を寄す。

哥　魂きわる命のうちに逢はやと賴むはかりそけふのわかれは

となん、德王村にて返哥認て、李綸へ渡せる歌　正之

哥　逢ハやと賴む心は天に滿る神もきくらむことぞ嬉しき

となむ。今夜も眞幸、元記と酌みぬる也。眞幸哥、數々よめり、爰に載せ侍る。岩崎武橋元記もよめ

哥　我宿をけふ立出てゝ明日よりは筑紫の空に旅寢をやせむ

と云。予宰府六度寺への書を認めて、長瀨が爲メに渡せり。例の如く今日も顯考を拜す。

二十二日　晴る。顯祖考を拜する事例の如し。丑ノ刻計に長瀨、岩崎、宰府の方へとて別る。哥を寄せ侍る　正之

言書　長瀨のぬしの初旅と聞へけれは、

玉鉾の道を學の君なれはこの行さきのさちはしるしも　眞幸

高山ぬしにいらへ參らす

玉矛の道ゆく我をさきくれ（祝）といはひ玉（給）へるみことかしこき　正之

と云。町の外迄送り出でゝ、

言詞書　山鹿の里にて別るゝ時に

めくりあふて都の春の花さかり君と共にもわれ見はやさむ　眞幸

なほさらに名殘は未つきねとも是やかきりと立別れゆく

とぞ、返哥し侍る。宿りに歸へりてしばらく寢る。人夫は長瀨氏が陣場へ申付たれば夜明て來る。宿りのあたりなる藥種屋升屋茂助永昌、先きに緣毛龜の詠を寄せける文に、寄りて其ノ餘の哥人へ傳語を託し侍る。山鹿湯の町々同郡相良は寅ノ方三里と稱す。町を東へ出でゝ左り大宮大明神石鳥井（居）隨身門を入りて、本社午未ノ間へ向ふ。猶東へ隈府道を行く。直にて壹里新町とて四五百軒の町家、しぶ團扇を多フク（ほ）作るを業とするといふ。湯山鹿（？）湯ノ町は、紙燈籠を造る。三間に高さ二軒計なるも骨無しに作るとぞ。毎年七月神獻す。本道より左り細道へ入る、不動岩とて山の中腹に數十丈の岩有り、其ノ西にゆるぎ岳とて有り。其のこなたに首石とて見ゆ。ゆるぎ岳より乾に彥岳權現の山とて有り、彥岳の神彼の首石を不動と爭ふて、綱の手懸りたるがゆるぎ岳と傳ふ。綱の跡とて峯二ッ股有り。遂に彥岳の勝となると傳ふ。蒲生原ルを過ぎ、右にてふづ塚とて有り。川を渡りて下內田也。是れ迄湯の町より二里長野仲英所へ寄る。其弟大受書を寄するの故也。素麵に酒出ヅ。右ノ方に富田伊豫守の城跡とて小高、其レより遠く高く見るは隈部但馬守が米の山の城山也。富田が城跡には、惣別同異成壞富田安藝守立と碑にしるして有りといふ。何といふ事を知らす。川を渡りて長谷川、山內を經て相良に至る。富田重五郎は莫、隱居名は德音なるが新宅へ入る。下內田々一里にして近し。仲英案內す。是レ々十丁計り川を渡りて相良本村也。艮（に）當る。阿蘇宮隨身門有り。艮一丁計淵五間計有り。其西に吾平山相良寺（天台宗延曆寺末なり）、其西に千手觀音堂鐘樓門皆ナ南向也。鵜がや不葺合尊の陵西の方二三丁登りて松二本生ひたり。牛馬爰に至れはたゝり有り。砂を取りて守に瘧必らす愈ゆ。爰を峯ノ尾羽根と號す。昔は此に堀有りて水流るゝと傳ふ。北に吾平山とて峨々たる山有り、東に矢筈岳と號する有

り、卯辰の間に米の山とて隈部が城跡有り。猿かへり其下に館の跡有りといふ。陵の乾に日向御祓(ひむかおはらひ)橡野などあり、山内村に屬す。橘といふ所も橡へ越る村に有り、是レは相良の内地。鵜戸さことといへるは艮に有り。中左九十坊今地名に殘る。緣起を見るに吾平山相良寺醫王院者、人皇五十二代　嵯峨天皇の治天、弘仁五年傳敎大師之開基云云。

朱雀天皇の御宇天曆年中、后妃の安產を祈りてしるし有りて、國司尾藤少卿肥の隆房卿に詔命を下し玉給ひ、本堂諸堂社坊院まで御再建あり、吾平山の額は勅額なりしと記す。今マ產婦の守しるし有り、其後源平の戰ひの時に、緒方三郎爰を燒クと傳ふ。大門に石ノ塔有り。觀音馬に乘りて緒方を捕へて石ノ塔に結ひ付けたり。飛ひかつらと て根なしのかつら、是レ緒方が首切りたる時に共に切れたる跡など、佛法の虛說區々也。歸て富田氏に宿す。相良の地士吉田藤助なと酌みて深更に及ぶ。昔し相良九十坊有りと傳ふ。

**二十三日**　雨少ク降る。相良村義七など宿す。夜身を淸め、鎭得靈神の逮夜を拜し奉る。

**二十四日**　雨降る。流れに身を淸めける。今朝叔正業夢に見ゆ。

鎭得靈神心に移り玉給ふ事有り、終日禮服して八方參詣の數を申す。暮に及びて本宅に歸へる。終日食する事なし。夜に入て食す。

**二十五日**　晴る。富田氏の宅を見るに、多久大和が出城の東にて石を碎て宅を作る。門を入て東に登り、淸水舞臺の如き懸作り有り。四間四方計、其東に續きて二十間に横四間計なる有り。其の北に四間計なるに、北に續きて北へ八軒に横八尺計なる、三段に下る所有り。其の北に十間に横二間半なるが、二階に續く。下に大工小屋鍛工の居有り、日々三四十人成ハ五六十人計にて營作す。予日向ノ口にて珍事なるを聞く。頃日爰に宿して（以下數字塗抹）

富田氏頗學を好ミて、心豁如たり。日々に見物の旅人絕へず、昔の小城は及はしと思ふ。今夜も吉〇氏(里カ)、筑後の矢部一本松なる所、江上宇兵衞なとゝ酌みける。主シ又明日は矢筈に登り玉給へと進めけるによりて

言書(詞)　矢筈山に登らんとして　正之

酌つゝも勇みにいさむものゝふの矢筈か岳に登る樂しも　正之

富田ぬしの家に松風をきゝて

幾千代もさかゆく宿とおもほへて浦山しくもすめる松風

幾千代もさかゆく庵や稲莚いなにはあらぬ松の風かも

高夫子にかへし　莫

武士の拔(やはず)が嶽を目に見(え)てのぼる朝日になとかおとらん

**二十六日**　晴る。山内村清次を案内に付けて、八方岳一に矢筈岳に登らしむ。東ノ方川を渡り行きて、上内田ノ内うそノ人家を左に見て登り行く、左原ルを經て右の細道を登る。凡ソ壹里左に年ノ原ルを見て行く。立テ石とて十間余の岩山左に見て登る。左に金石岳遠く、岩山ノ押立タル山也。大平野に飲みぬ。巽に阿蘇山煙見ゆ。猫岳も其ノ東に續く辰に九重山、已に鞍岳見ゆる。是レより八方岳の頂に登る、嶮也。草を取りて登る。頂に石祠有り、長崎の禪僧が近年立たる(も)のなり。午未の間に向ふ、白山妙理大權現、金毘羅大權現、龍天護法善神と刻す。申ノ方溫泉岳、未ノ方金峯山三ノ岳、已ノ方鞍岳、巽の角阿蘇山猫岳、辰に九重山見ゆる也。諫早のたら山は正面に見ゆ。小國の山は東に當る。坤に天草談合島、克ク見る。(ゆカ)隈府は午未の間に見ゆ。相良富田氏ゟ正東二里半計頂也。爰は菊池郡也。前田迄は山鹿郡也。山を未に下りて川を渡り、左に米ノ山古城跡を見る。天正中隈部但馬守が城とす。東西二十二間、南北八間、高サ四百間とぞ。上永野村の中也。又ゟ登りて坤の方へ、猿歸りの古城跡を見んとするに、日暮にせまり、道もあらぬ所なれは、急なる所を東へ下る。くらし。

女鹿の鳴を聞てよめる　正之

秋萩の露もたわゝに夜も置て妻呼鹿の聲そ悲しき

と云。猿歸も上永野内にて、小城東西十八間、南北六間、高サ五百五十六間、隈部但馬守城也。上内田がうのす古城、是レも山城にて城主も同じ。東西十五間、南北十八間、高サ二百四十間とす。隈部館の跡も永野村の内に有り、猿歸り道にては、右に穴岩三ッ岩帆柱なと見ゆといふ。立石にて文次所にて松火を乞ふて、深瀨辻三井原ルを經て、富田德音所へ歸へる。

## 附載

以下八頁は殘闕斷簡にて京都日記の一部も交る。

琴仙堂

寛政二年庚戌十月

中山慶賀使者尙容謹書

尙容之印

朝陽

宜野灣王子染筆

後水尾帝勅製眞衣

平松殿服せらる　右平松殿ニテ見聞

七日

月花とめなれし山のこゝかしこ心あてなるけさの白雪

白雪　大村永全妻の哥也

禁裏御局方ノ繪ニ列女傳ヲ命シ玉給ヒイケルトソ

八日

肥前國松浦神寶寫シ

鈴也

尾州木田村鄕士

大館高門

左市

非藏人橋本土佐　梅ノ宮社家肥後守橋經亮持參

曇るともかこつもあやなふりはへて行幸見に行く冬の旅路を

本居宣長

上田東作御炎上の後の哥

四の海靜なる世に住む民のしはしの波の立居をそ見る（以下缺）

**二十三日**

俗說辨、狹衣にうるまの島と有て、下紐（したひも）にうるまとは琉球なりと記せり。千載集に前大納言公綱の哥に、おほつかなうるまのしまの人なれやわがことのはをしらずがほなる

**二十四日**

烏丸佛光寺上ル所大尾庄兵衞大愚の短冊求る所、百枚にて三匁五分横壹寸七分長尺一寸七分計り。信州伊奈郡（那）座光寺上穗光禪寺にて水無瀨養子、〇〇當寅ノ正月の事也。

**二十六日**

天草濱田落合與吉、秋月佐渡守跡山ノ内富五郎、豫州小松（今治ヵ四五里北）一柳侯の家士、竹ヵ鼻縫藏今治にて、長野景〇〇、木村官兵衞、右山田門人也。丸龜、森助左衞門、國學忘貝三卷著述也。石州濱田ノ人小笹大記。

右山岡藏人知己

堂上譜畧

關白前左大臣（從一位五十三　關司輔平公）

寛政三年辛亥二月十六月。竹田小三郎忠功時年廿歲

〇雨森良圭、名彥章、字子明、宅有于二條車屋町、大坂人大岡庄藏童僕、藤本良助

**二十四日**

高堂咫尺竹陰間。長夏初從鹿谷攀。座裡淸風孔北海。欄前疎雨謝東山。栖心詎在江湖上。幽意自甘蘿薜間。爲使狂生侍泛愛。終乘薄暮作泥還。

添奉鳴謝

光祿大夫富小路公閣下

薩藩田爲國拜

**二十五日**

今日歌會ノ哥也

河五月雨

持豐卿

ふりそへはよとのわか薦波こへて河音たかしさみたれのころ
さみたれの雲こる山の麓河みかさにしつむ瀬々の岩かと　高宇丸

庭上落花

庭の面に雪とふりつむ櫻花よそにさはひて春風そ吹く　小豆澤覺三郎勝休

出雲松江

八木春嶺　山本左膳
平松雑掌　御家老隱宅
品川内膳　中宮寺宮
岩井木工之亞室　谷川氏弓

春の名殘　名殘の露

二十六日

畑傳兵衞盛次　子辨次郎

極星夜照杜康家。賀宴朝開酒若河。坐賓祝得主翁壽。同賦簷松佳色歌。

二十六

具選

同○二品源、三品藤羽林、飲左金吾寓居。

富小路左衞佐殿にてノ作　良直

梅霖雨斂冷風輕。賓主揚杯坐晩晴。莫道瘦園味淡。芽厨是敵五侯鯖。

里言恭寄贈

龍草廬老先生淸鑑並乞郢政

山計人皆仰。芳聲震海東。詩方唐李白。賦比漢揚雄。眉宇頻思接。龍門幾願通。良緣天不假。揮筆寄丹衷。

中山毛廷、杜拜稿

草廬にて相識

東適道カ　氏江柳園

二十八日

六月二日、伏原家へ目見

モウダラゲ、月ノ井妾

ニシコマケ

來ラヌハ〇モウダラケ斗也

モウダラゲハ蠟虎ノ皮上ニ座シ、眞向ニ兩足ヲ立ツ。妾ハ白皮ノ上ニ襟ニ懸ケル鏡ノ如キ有リ。

今般

禁裏御所方御造營儀者、御手傳無之ニ付、明和三戌年准后御方御別殿御普請之節之通諸手傳人足地形方賃銀共京都町中ヘ四部、五幾内村々六部、割符被仰附、右之外御所之遷幸還幸之節、御道筋取繕入用銀者、是又先例之通不殘京都町中ヘ割賦可被仰附處、此度者大造之御造營ニ付、右准后御別殿之振合ニ割符被仰付候ヘハ割符高相成火災後之義ニ付、別而難儀可致候間、御憐愍ヲ以、右諸手傳人足地形方賃銀其外共割符之内、多分公儀御入用ヲ以被仰付、殘り之義は、五幾内、近江、丹波、播磨八ヶ國御藏入ニ割符被仰付候。京都町中之儀ハ前書之通火災後故、寛永度之振合ヲ以禁裏御所之御築筑地、外所々道筋地形平均等取繕入用計割符無仰付、勿論此度遷幸還幸御道筋ニ相成ル町々ハ、銘々町内道造掃除入用茂可相掛ニ付、相除其餘町中ヘ寶永之度出銀高之通類燒町夫人人足百人ニ付銀五拾七匁八分宛、燒殘り町者同百人ニ付銀百拾四匁三分宛。（以下缺）

〇陰也、神代垣土之文字謂之乎。

**七月二日**

興州川之江町宮崎木工助、父宮崎因幡、松岡内記定安、姓越智

**三日**　上行寺日悌　渡部常安

古歌　武藏野に堀金の井も有ものを嬉しく水の近付にけり

**九日**

阿波國德島紙屋町山口〇〇玄竹、今は岡作陰といふ。

福島　土岐　上達

德島家中船頭小田信八、岩倉、柳原兩家知己、芙蓉も同し。

豐前彦山ノ座主、岩倉家の親族なり。今持明院家より養ふ。

〇小川才治、今マ筑前秋月ノ儒、岩倉家知己。

備前ノ臣池田齋宮之助、岩倉家緣家。

○福山城下義法院、是レ岩倉家の陰府を乞ふ。

十一日

長崎今鍛治屋町佐渡ノ人。（以下缺）



昭和十九年七月八日印刷
昭和十九年七月十二日發行
（五、〇〇〇部）

高山彦九郎歌集 高山朽葉集
（特）定價金四圓四拾錢
査定番號四ノ五二禮

著者 福井久藏
東京都神田區須田町一丁目十一番地

發行者 杉山榮一
東京都神田區三崎町二丁目十二番地

印刷者（東京三九）加藤保
東京都神田區須田町一丁目十一番地

發行所 株式會社 山一書房
電話神田（25）七四一番
振替東京四七四四番
會員番號一一一五二五番

著作權所有

出版會承認
い310195

配給元 日本出版配給株式會社

99 4
121

終